

キューブ新体操教室 ジュニア選手へのメッセージ

新体操が好きでさまざまな夢を持って取り組んでいるジュニアたち
男子新体操を次のステップにと、情熱を持って戦い続けている指導者や
新体操の魅力を伝えるチャンスを常に求め、ブログなどで紹介しているジャーナリストに、
キューブ新体操教室の選手たちへのメッセージなどを伺った。

男子新体操に育てられ そして、伝承していこうという自分がある

ジュニア世代は通過点
夢を持って大きく羽ばたけ！

今回の大会は参加人数が多く、にぎやかで、ジュニアの大会とは思えないほど、レベルの高い大会であった。

佐藤綾人、颯人、嘉人の3兄弟は、小さいころから知っていて注目してきたが、今大会で綾人が個人総合で2位に入賞。颯人と嘉人は種目ごとに小さなミスがあり、表彰台に上がることはできなかったが、ジュニアの域を超えた高いレベルの選手であることは言うまでもない。

東北はこれまでも県域を越えて合同練習を行うなど、ジュニア選手のレベル向上に努めてきた。これは、大会では敵となる相手と一緒に練習を行うことで、互いの強い刺激になるからだ。
ジュニアの選手たちは、これか

からも互いによりきライバルとして競い合いながら、どうもまれて、自分自身をどう磨き上げるかを考えながら歩んでほしいと思う。大会に出場し、思うように演技できなかった時に、「どこがうまくできなかったのか」「なぜうまくできなかったのか」を自分自身で考え、先の見通しを立てて練習に励んでもらいたい。ジュニア世代はまだ通過点。すぐに結果がでなくても、あきらめないで自分の好きなことをこれからも続けてほしいと願う。

ジュニア世代に夢を持ってもらおうのが大人の役目
男子新体操を発信していく

新体操には、全国の選手監督が一丸となり求めている人間性がある。自己犠牲の精神や受けた恩を感じ取れるそういう人間味がこの

スポーツの練習プロセスには詰まっている。男子新体操は競技人口を増やすのが最優先課題ではあるが、観た人に感動を与えたり、大切なものを呼び覚ませたりできるスポーツ。もっと見せる場を作って行かねばと感じている。

ジュニア世代に夢を持ってもらうのは私たち大人の役目。この競技と出会い、この競技に育てられ、そして、この競技を伝承していくうとして自分がここにいる。

新体操は世界に誇れるスポーツ！ 国際的にみれば、新体操といえば女子の競技というイメージが強いと思うが、今、私たち大人がこれからのジュニアの世代の子どもたちのために、一生懸命に世界に男子新体操を発信しているところである。

ジュニア世代にはこれからも大きな夢を持ってしっかり進んでほしいと願う。



中田 吉光さん

Yoshimitsu Nakata

青森大学新体操部部長。日本体操協会では、男子新体操委員会の委員長を務める。青森大学監督時代には、団体競技で全日本インカレ10連覇をはじめ、多くの個人チャンピオンを育てる。また、現在は、青森大学卒業生による「BLUE TOKYO」というユニットやシルク・ドゥ・ソレイユパフォーマーなど、エンターテインメントの世界で活躍する人材を多く輩出。男子新体操選手の進路選択の幅を広げることに貢献している。

2012年に、青森大学監督を退き、「青森を男子新体操の聖地に」という夢と、男子新体操の地位向上の両方を実現するために、日々精力的に活動。その努力が実り、2013年には、男子新体操の舞台「BLUE」を青森市で開催し、成功をおさめ、世界的デザイナー・三宅一生氏プロデュースのイベント「青森大学男子新体操部」では代々木第二体育館を満員にする。多岐にわたり、男子新体操の普及、知名度アップのための活動を精力的に行っている。

3回の全日本ジュニアで見た 3人の成長、そして課題

「白石に男子新体操をやっている三つ子の兄弟がいる。」
そんな噂を聞いて、色めきたったのは平成23年のことだったと思う。そして、その年の全日本ジュニアで、私は彼らを初めて見るようになった。なんとと言っても、いくら三つ子とはいえ、あまりにもそっくりなことに驚いた。顔も体形も「うりふたつ(いや三つ)」なのだ。

この年の全日本ジュニアには39人の選手が出場していたが、そのうちの3人が同じ顔なのだから、見ているほうも混乱する。演技順によっては、たった今、演技を終えた選手と同じ顔の選手がまた次に出てくる、といった状況になるのだから。観客はもちろん、もしかしたら審判も目を白黒させてい



椎名 桂子さん
Keiko Shiina

1992年よりフリーライターとして活動。1998年より新体操観戦にはまり、2004年よりwebサイト「スポーツナビ」「Number」「Sportiva」などに、新体操の記事を執筆。現在は、個人ブログ「新体操研究所」や体操・新体操のポータルサイト「ジムラブ」などで新体操の情報を発信し続けている。

たのではないだろうか。

この年、全国デビューを飾った「白石の三つ子」佐藤3兄弟のインパクトは大きかった。三つ子という話題性だけではなく、激戦区東北を勝ち抜いて全日本ジュニアに出てくるだけあって、中学1年生の時点で彼らはかなりうまかったから、なおさらだ。

初出場の全日本ジュニアでの成績は、5位綾人、10位嘉人、13位颯人だった。それぞれにちよこちよこミスもありながらこの成績は、全日本デビューとしては上出来だろう。

彼らの演技は、中学1年生にしては、非常に見せる力をもっていた。それは、彼らの素質によるものもあるだろうが、指導にあたっては、本多和宏氏の力に負うところも大きいのだろうと思う。自身も国士館大学の新体操選手として活躍していた本多氏は、現役時代

から非常に魅力的な演技をする選手だった。いわゆる「センスがいい」のだ。本多氏が指導する選手、チームにはやはりその「本多イズム」が継承される。創部2年で高校選抜大会団体準優勝(平成20年度)を成し遂げた聖和学園高校もそうだったし、この佐藤兄弟も例にもれない。

佐藤兄弟にとって2度目の全日本ジュニアとなった平成24年、キューブは、佐藤兄弟と高橋兄弟という「三つ子×2組」という奇跡の団体を送り込んできた。中2と中3の6人で組んだこの団体は、体の大きさも揃っていて、構成も凝っていた。ジュニアチームとしてはかなり能力も高く、優勝も十分に狙えるチームだったと思う。しかし、結果は4位。倒立でのミスが致命傷となった。

ただ、たとえ倒立でのミスがなかったとしても、優勝は難しかっただろうと思う。キューブの演技はとにかく、動きが小刻みで、止まらない。曲に合わせてダンスのようなかっこよさはどのチームよりもあるのだが、そういう細かい動きでは、新体操で重視される「同調性」を見せることは難しい。動けば動くほど、ミスもやすく、減点箇所も多くなってしまふ。ただ、それだけに、キューブの演技はかっこいい！ それは誰もが認めるところだと思ふ。

同じことは、佐藤兄弟の個人についても言える。平成24年の全日本ジュニアでは、5位嘉人、6位綾人、7位颯人と3人で同じような順位となったが、このときは3人とも種目による得点の差が大きかった。いい種目では高い点数が出るが、ダメだとダメ。そのいもそろってそういうむらつ気のある選手だったのだ。それは、彼らの性格や資質による部分もあるには違いないが、おそらく彼らやキューブが目指している新体操にそういう傾向があるのではないかと思う。

ミスがなければ ジュニアではトップレベルを証明 より個性を伸ばし高校での飛躍を！

平成25年、3回目になる全日本ジュニアで、綾人が2位になった。この大会で彼は、初めて4種目をほぼノーミスでまとも、すべて9点台にのせた。5位になった嘉人も、落下のあったスティック以外も、よくまとも、ロープでは9点台もマークした。颯人は、この大会ではミスが多く、10位で終わってしまったが、もっとも高い得点をあげたクラブだと9点近い点で、種目別で5位に入っている。

初めて見た2年前と比べると、体もぐっと大きくなり、筋力もついてきたのか、演技中のタンプリングも強くなり、迫力が出てきた。出来によって試合での成績には差がつくことはあっても、今はまだ3人の力は拮抗しており、兄弟で切磋琢磨できる環境にいると言えるだろう。

来年から、いよいよ高校生になる。せつかくの「白石の宝、宮城の宝」である。県内の高校に進学して、インターハイに宮城旋風を巻き起こしてほしいものだ。彼らには十分その力がある。そして、個人選手としては、個々の違いがもっと明確になっていったときに、どんな選手になるのか実に楽しみだ。顔も体もそっくりな3人だが、よく見ると選手としての個性や性格には違いがある。ただ、あまりにも外見が似ているため、個性が見え過ぎやすい。それは、もったいないと思うのだ。能力も魅力もある3人なのだから、これからは「三つ子」という括りを吹き飛ばすような個性を発揮してほしい。

誰よりもかっこいい
誰よりも美しい
誰よりも力強い
誰よりも巧い
なんでもいいのだ。3人それぞれが、自分の得意な部分で「ナンバーワン」を目指す。そんな彼らを見ることのできるなら、男子新体操は私にとってますます魅力的なスポーツになるに違いない。